

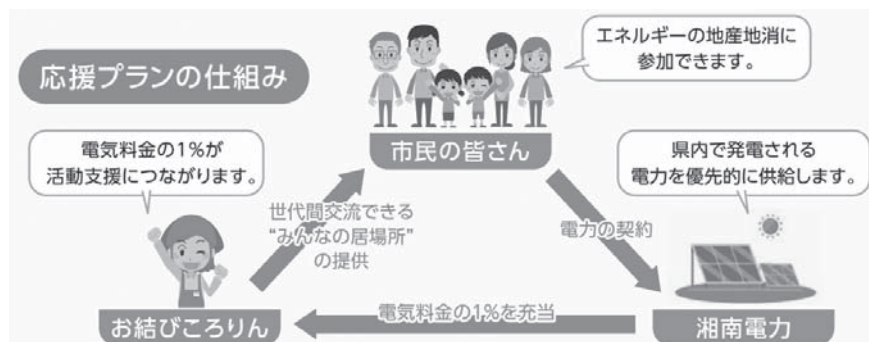
湘南電力、小売電気事業者として地域経済活性化に取り組む 地域で調達、地域に供給

小田原地域で小売電気事業を展開する湘南電力。ほうとくエネルギーや神奈川県太陽光発電などから電源を調達し、地産地消することを推進する。売上の1%を、地域課題解決に取り組む団体の支援に使う「地域応援メニュー」が特徴。近年では初期費用ゼロで住宅に太陽光発電を設置する「0円ソーラー」やカーボンフリーメニューを展開している。

湘南電力は2014年9月に設立。資本金は2,500万円で、本社を神奈川県小田原市扇町1丁目30-13に置く。株主は地場企業で都市ガス事業者の小田原ガス、LPガス事業者の古川を中心に、発電事業者のほうとくエネルギー、不動産会社のニッショー、浄化槽の清掃などを手掛ける小田原衛生グループのゼロワン株式会社とエナリス、サッカーチームの湘南ベルマーレ、REXEV。代表取締役社長は小田原ガスの原正樹氏が務める。小田原の小売電気事業者であり、地域電力の地産地消を掲げ、小田原エネルギーコンソーシアムの中で電力を供給する役割を担う。また、ほうとくエネルギーも地場企業37社が株主となっており、関係企業は多い。

主に小田原ガスと古川が営業展開を担当し、小田原市や平塚市、藤沢市周辺を中心に、低圧3,500件、高圧250拠点程度の顧客を持つ。

もともとはエナリスが99.0%、湘南ベルマーレが1%を出資して設立した企業で、事業収益の一部をベルマー



湘南電力HPより応援メニューイメージ(例：子ども食堂「お結びころりん」コース)

レに還元し、ベルマーレが湘南地域に貢献する資金として活用する取り組みをスタートした。2017年、エナリスが株式の80%を手放して先述の地場企業各社が参画(REXEV以外、REXEVはその後出資)、この取り組みを「地域応援メニュー」として強化し、サッカーだけでなく地域のママさんバレーチームや障害者自立支援団体、子ども食堂などにも、電力契約を通じて応援できる仕組みを構築した。

湘南電力は、地場企業による小売電気事業を通じて電力の地産地消を推

進する。地域応援メニューによる「地産地消」の取り組みだけでなく、神奈川県内の発電所から積極的に電力を買取することで「地産」の取り組みも応援。神奈川県企業局が保有する湘南ベルマーレ発電所(太陽光発電、小水力発電)や、ほうとくエネルギーの太陽光発電所のほか、一般家庭で固定価格買取制度(FIT)を満了した太陽光発電からの電力買取を計画している。発電所の絶対量が少ないこともあり、卸電力市場からの調達も多いが、着実に神奈川県の発電所からの電力買取を進めて

大脇紀業務部長、山崎剛一開発部長に聞く湘南電力の展開

——湘南電力とは

大脇 2014年にエナリスと湘南ベルマーレが起業した。エナリスは東京の新電力大手だが、ゆくゆくは地場企業に運営してもらいたいと考えていたようだ。一方で、東日本大震災をきっかけに小田原の市民や産業界などがエネルギーを地産地消する取り組みをスタートし、発電事業者のほうとくエネルギーを2012年に設立したものの、その電力を自分たちで消費する手段が必要だった。こうした両社の思惑が合致し、2017年に小田原ガスなど6社が株式の80%を取得した。

——湘南電力の理念は

大脇 地域の電力をなるべく供給し、地域でつかっていただくこと。神奈川県に特化した電源の調達と供給を行っている。地域内の資金循環も目指しており、供給価格では大手にかなわないものの、売上の1%を様々な形で地域還元する取り組みを打ち出し、評価いただいている。特に、子ども食堂の運営先を応援するプランをコロナ禍の中で開始したが、半年で400件の契約をいただくなど反響が大きかった。

——特徴は

大脇 電力の地産地消、地域内の資金循環のほか、行政との関係も重要視している。神奈川県や小田原市、松田町、南足柄市、開成町などと、再エネ導入やバーチャルパワープラント(VPP)実証で協力体制を構築した。特に小田原市は2050年のゼロカーボンシティ化を宣言していることもあり、我々も産業界として協力したい。

電源もほうとくエネルギーが持つ約2.3MWを相対取引しているほか、神奈川県内のFIT電源からの調達を増やすべく動いているが、顧客獲得件数に対して調達が追いつかず、20%程度となっているのが課題。

——現在の注力分野は

大脇 神奈川県の補助金も活用しながら、初期費用ゼロで太陽光発電を設置する「0円ソーラー」を家庭向けに展開している。電力を自家消費してもらいながら、余剰をFIT売電することで収益を確保し、10年後にお客様に譲渡する。2020年は100件程度の依頼があり、2021年はさらに拡大していきたい。

山崎 完全に0円ではなく月額をいただく形にはなるが、0円ソーラーと蓄電池のセット展開も進める。地域内で太陽光の設置が増えると日中に余剰電力が生まれがちになるので、これをシフトさせるのに必要だが、高価なのが大きな課題だ。

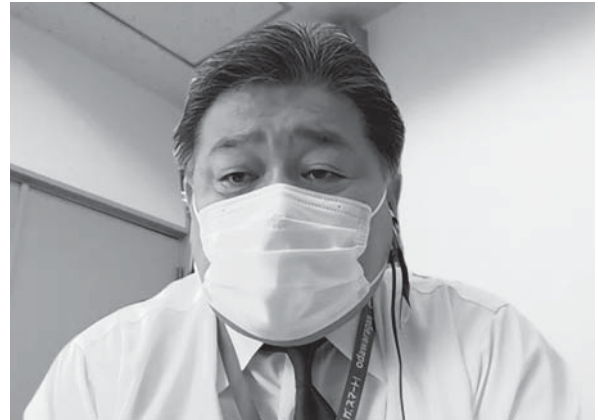
大脇 カーボンフリーの電力も提供開始した。環境省の補助金対象にも認定されており、電気自動車(EV)導入とセットで80万円が補助される。

——今冬の卸電力市場価格高騰により倒産する新電力も出ているが、湘南電力の状況は

大脇 決算期が1～12月であり、前年分(12月)については軽微だった。ただ、1月に入っても沈静化せず長期に高騰したことで大きな打撃を受けた。一応、7割程度を相対契約で調達したのだが、残りについて大きく影響を受けた。この1年を通してようやく黒字化できるかというところだ。地場の金融機関とも良好な関係があり支援していただいているので資金調達は問題ないが、自治体の補助事業採択の兼ね合いもあるので通年で黒字化したい。

——小田原市周辺の特徴・地域課題をどう見ているか

大脇 経済の大きな柱の一つは観光業。もう一つは農業、畜産業、漁業といった自然を生かしたものと、それ



大脇氏



山崎氏

に関連する加工業など。ただ、耕作放棄地が増加傾向にあり、営農型太陽光発電(ソーラーシェアリング)も考えられるが、農地転用がしやすくなればと思う。

——今後の展開は

山崎 地域の事業者を広く巻き込んでビジネス展開する必要性を感じ、議論し始めた。地域的に観光は一つのターゲットになるので、エネルギーを通じてこれをどのように盛り上げられるか、若い人を中心とした声を集め具現化するために取り組む考え。小田原の周辺は人口減少が進んでおり、地域の核となるような大企業も2000年ごろからの事業再編で撤退し、税収減となっている。こうした中でインフラをどう維持していくのが課題。湘南電力の出資企業とイメージしているのはドイツのシュタットベルケのような取り組み。湘南電力はその中心企業になるべく事業展開していく。そのためには電源が絶対的に不足しているので、活用したい用地を持つ企業を探すのが当面の課題になる。